

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

帰国報告

平成 24 年 9 月 26 日

氏名：
谷口円香

派遣時の所属：
東京大学大学院人文社会系研究科
博士課程（フランス語フランス文学専門分野）

派遣形態：
個人派遣

研究課題名：
「詩的言語と造形言語の共鳴
ーランボーの詩のキュビズム画家たちによる挿絵の問題を中心に」

派遣先での活動：

1) 派遣先の基本情報

国名：フランス

都市名：パリ、ル・マン

研究機関名：パリ第4＝ソルボンヌ大学博士課程、フランス国立図書館、カンディンスキー図書館、ル・マン市立図書館

コンタクトした主な研究者：アンドレ・ギュイヨー（ソルボンヌ大学教授）、ジェローム・モリヨン（ル・マン市立図書館司書）

2) 派遣期間

出発日：平成 24 年 1 月 14 日

帰国日：平成 24 年 9 月 23 日

派遣期間：243 日

主な研究成果：

1) 当初の計画の概要：

準備中の博士論文の第 8 章を成す、キュビズムの画家ロジェ・ド・ラ・フレネによる『イリュミナシオン』のためのデッサンに関して、資料の調査・発掘と分析を勧め、ランボーの詩的言語がいかにキュビズムの造形言語の問題意識と照応し影響を与えたかという、未だ十分に解明されていない点についての理解を深める。また、ランボー研究の第一人者アンドレ・ギュイヨー教授（ソルボンヌ大学）に研究成果を示し、面談を通じて足りない視点を補い、博士論文の完成を目指す。

2) 実際に達成された成果 :

1920年に計画された、ロジェ・ド・ラ・フレネによる『イルミネーション』のためのデッサンを調査し、ランボーの詩的言語とラ・フレネの造形言語の間にどのような共鳴関係にあるのかを分析した。フランス国立図書館に収蔵されているラ・フレネの展覧会カタログ、画家のモノグラフィを全て参照した後、パリのカンディンスキー図書館に収蔵されているラ・フレネ文献を調査した。1920～1925年の画家の手紙から画家の造形意識を具体的に知ることができたほか、死後から現在に至るまでの画家に関する新聞記事等の切り抜きからは、ラ・フレネの作品の後世の受容の変遷を知ることができた。ついで、ラ・フレネの出身地であるル・マン市の市立図書館のラ・フレネ担当の司書モリヨン氏にコンタクトをとり、市立図書館を訪れた。収蔵されているラ・フレネ関連の資料を調査し、ラ・フレネが文学にも深い関心を寄せていたことを確認した。また、モリヨン氏が『イルミネーション』のためのラ・フレネのデッサンのオリジナルを所有していると推測される人物にコンタクトをとってくださった。その結果、オリジナルデッサンはコレクターの死後に散逸し、行方が分からなくなっていることが判明した。これらの資料調査の結果を踏まえ、現段階で明白な客観的事実から導きうるラ・フレネのランボー詩の解釈を浮き彫りにし、ランボーの詩的言語がラ・フレネの造形言語に与えた影響の分析を『フランス語フランス文学研究』第45号に紀要論文として発表した他、複数の面談を通じてソルボンヌ大学のランボー研究者ギョイヨー教授の指導を仰ぎ、博論の第8章を完成させ、9月7日に博士論文をソルボンヌ大学に提出した。

3) 今後の研究展望 :

今回の調査と分析により、ランボーの詩的言語が、キュビズムの画家ラ・フレネの造形状の問題意識と密接に結びついており、その造形上の試行錯誤に影響を与えていることを確認した。その考察をふまえて、他の例も検証したい。例えば、同時代の彫刻家オシップ・ザッキンもランボー詩から触発された作品を残している。ギョイヨー教授からも調査を進められており、次の調査対象としたい。また、そうした具体的な分析を行った上で、キュビズムとランボーの詩的言語の関連性を、文学と美術という境界を越えた芸術表現の本質的な問題として、より大きな枠組みから理論的に考察したいと考えている。